

「最近さ、ケータイの電波の調子悪くね？ フォトンベルトの電磁波の影響じゃねえ？」  
始業前の教室では、生徒たちがおのおのの関心事を賑やかに話している。

窓際の最後部の席に到着したマリが鞆からノートや電子教科書などを取り出ししていると、「オイスツ」と朝練を終えたばかりの汗臭い、白のスポーツバックとバットケースを肩に担いだ野球部の男子生徒が勢いよく、マリの一つ前の座席に腰を落とした。

その勢いでマリの机に男子生徒の汗が飛び散る。陽に焼けた小麦色の肌の青年は、そんなことはお構いなしといった様子で勢いよく窓を開け、火照ったその身に風を当てた。

「ちよっ！ 汗を飛ばさないでって、いっつも言ってるでしょ！」

「悪い」

マリが必死で抗議をするも、男子生徒は少しも悪びれた様子もなく、A4サイズのフレキシブル電子パッドをウチワ代わりに「あち」と顔を扇いだ。

この白いTシャツ姿の青年は、【上田ヒロユキ 2年A組 野球部主将】。

「朝練すると、もう弁当食べたくないからね？」

上田はマリのほうを振り返りニコリと笑った。

「知らないわよ、私、朝練なんかしないもの」とマリは無愛想に答え、ティッシュを取り出して机の汗を拭き取った。

「そりゃ、そうだ！」

朝練をする放送部を想像し、上田はふたたび白い歯を見せて笑った。

「おはよー、諸君」

先生が教室に入って来たのをきっかけに、朝のクラスルームが始まった。先生の名前は【藤原紀子 2年A組担任 現代国語・古文 バスケ部顧問】。年齢は30歳手前、独身。悪い事は悪いとハッキリ言うそのさっぱりした性格は、他の教師からうとまれることはあっても、生徒からの評判はすこぶる良い。

藤原先生は教壇に立つなり、早速出席簿を手に、男子から順番に点呼を始めた。

「石田ー」

「ハイ！」

元氣よく手を挙げて返事をした、前列中央の男子生徒は【石田ダイキチ 2年A組 学級委員長 バスケ部部长】。

学業もスポーツもそつなくこなし、学級委員長も進んで立候補する優秀な生徒。ただし、その積極性の源は、表向きは「学園生活をより良いものにするため」だが、本音では大学推薦狙いの内申点稼ぎや、親、女子に対してのアピールなど、彼なりの計算も入っている。

基本的には「トラブルに巻き込まれるはゴメン」と思っているため、逃げることを恥とは考えていない。

そんな彼も多くの男子生徒同様に、学園のアイドルたるサトミアンである。

「伊東ー」

「ハイ」

「上杉ー」

「ハ、ハイイ」

考え事でもしていたのか、まるで不意を突かれたように返事をしたのは【上杉アキラ 2年A組 映画同好会】。太い眉毛に、ずんぐりとした愛嬌のある体型が特徴。

性格は大人しいが、趣味のカメラを構えると一転、積極的に他人にアプローチしていく。新世代スマホで撮影しては、動画サイトにアップするのをライフワークとしている。高校卒業後は映画専門学校に進むべく東京に行きたいと思っっているのだが、いまいち自信を持たず、最近はずかしい様子だ。

「上田ー」

「ハイーイ」

体が冷えたのか、マリの机に汗を飛ばした上田がパーカーの上から制服を羽織りながら返事をした。勉強よりも野球と昼飯のみに学園生活の意義を感じている高校球児。細かい事は気にしない性格で、たびたびマリにちょっかいを出しては困らせたりしていた。しかしいざという時は、みんなから頼られる面倒見の良い一面もある。

そして上田は、明智と中学時代からの同級生ということ、マリも知っている。

「上田、そのパーカー似合ってるじゃないかあ」

藤原先生が、山吹色のパーカーの上から制服を着込んだ上田に微笑んだ。

「えっ？ ど、ドーも、へへ」

「私は好きだよ。でも、デートのときにも着るんだな。フード付きは禁止されているはずだろ？」自分のファッションセンスを先生が褒めてくれた、とテレ笑いした上田だったが、藤原先生の言わんとしたことがわかり、今さらながらパーカーを目立たないようにと、制服の襟をぐいっと引っ張って見せた。

藤原先生は服装についてそれ以上追及せず、ふたたび点呼を始めた。

「サッカー部の武田は遠征中で欠席……」

「平賀ー」

「はいー」

気だるそうに、肘を机につけたまま右手を挙げて返事をした【平賀ゲンキ 2年A組 科学部部長】。

学業優秀。自分というものをしっかり持っていて、周りに流されない性格。教室内で趣味のアニメ関係の雑誌を堂々と広げて読む姿をクラスメイトにバカにされても気にはしない。自分の価値観を譲らないその姿勢に、周りの生徒も一目置いている。また、毎年秋に行われる備上八幡時代祭りの火縄銃演目に、祖父、父とともに強制的に出演させられていることもあって、古式銃、火薬の扱いには慣れている。とはいえ、現代社会ではまったくもって不必要な技能といえた。

「名は体を表さず……」

出席簿に印を付けつつも、藤原先生は返事をする生徒一人一人の様子を確認することを忘れない。

「前田ー……は、今日も何事もなく遅刻と。誰かアイツに白装束を着せて連れて来い……」

藤原先生は、空席になった前田なる人物の席を、苦々しく見つめてぼやいた。続けて女子の点呼へと移る。

「大谷ー」

「はいー」

最前列のドア脇の席に座る【大谷ヒデミ 2年A組 クラス副委員長 吹奏楽部】が短く返事

をした。

一見素直そうに見える目鼻立ちの彼女だが、少々皮肉を込めた言い回しになることが多い。副委員長になったのは半ば周りから押しつけられるような形でのこと。かと言って無気力というわけではなく、音楽が好きで、どこにでもいる等身大の高校生である。時間さえあれば愛用のサックスで部員とセッションをしている彼女の信条は、沈黙は「死」、音楽は「愛」。

「遠山ー」

「はいっ」

今はそれどころではないといわんばかりに、顔も向けずに返事をしたマリ。上田がめいっばいに椅子に背を持たれかけているのが気になって、机をぐいと引き寄せた。

すでに紹介したようにマリは放送部に所属。この年代特有の異性を強く意識した感じはなく、男子とも普通に会話をする。男子にすれば他の女子よりも話しかけやすいタイプ、見方を換えれば、あまり恋愛対象として見られていないといえるかもしれない。しかし一部の男子の中では、「眼鏡を外して髪型を変えれば意外とイケるかも」「いや眼鏡をしているところがいいんだ」という無益な論争が交わされている。

「北条ー」

「ハイハイー」

右隣の上杉アキラのこそこそしている様子が気になり、175センチの長身を生かしてのぞき見していた【北条マサミ 2年A組 バレー部部长】。視線を感じた上杉が彼女のほうに顔を向ける寸前、誤魔化すようにそっぽを向きつつ軽い調子で返事をした。

理不尽なことがあると、相手を選ばず筋を通すことから、女子からは姉御的な存在で慕われている。反対に男子からは異性とは見られておらず、完全に男扱いをされている。とはいえ、北条マサミ自身も同年代の男子に興味を持っている様子は見せない。しかし、実際には、同校のとある先生に密かに好意をよせていることは、彼女だけの秘密だ。

こうして生徒全員の点呼を終えた藤原先生は続けて連絡事項を言い渡す。

「最近、世界的規模で新型の鳥インフルエンザが流行しているので、外出先から戻った際は、必ずうがいと消毒をするようにお達しが……って、小学校じゃないんだから、まったく……」

誰に聞かせるでもなくそんなぼやきを挟みながら、「あと昨日のワクチン接種をしていない者は、昼休みに保健室へ行くこと……。石田、大谷、あとはよろしく」と言い残し、藤原先生は足早に教室を後にした。

「それではケータイ電話を回収しまーす」

正副クラス委員長の石田ダイキチと大谷ヒデミが立ち上がり、プラスチックの籠をもって各座席を回り始めた。校内ではケータイ電話の使用は禁止されており、始業時に回収、終業後に返還することになっている。

「はいはい、ケータイね」

芝居じみた挙動で、ずいぶんぐめかしいケータイを差し出した上杉は、疑う様子もなく預かったヒデミを見て、安心したように鼻歌を鳴らした。しかしヒデミ越しに、鋭く睨みつける北条マサミの疑惑の視線に気づくと、上杉はそそくさと取り出したフレキシブル電子パッドの教科書を開いて顔を隠した。

「上杉のヤツ、なんか怪しいな……ムッ？」

上杉のほうへ身を乗り出したマサミの前に、石田が立ちふさがった。無言で籠をつきあげ、ケ

ータイの提出を求めている。

「授業中に使ったりしないからさー、いいじゃん」

一度は言ってみるのがマサミ。

「いいから、早く」

「……つまらないヤツ」

まったく相手にする気のない口調で、石田はふたたび籠をマサミの前に差し出した。

一方、ヒデミはというと、こちらも神経を削られる作業を強いられていた。

「最新モデル、なんだから、ちゃんと丁寧に、扱ってくださいよ」

言葉を一字一句確認するような話し方をする平賀ゲンキは、名残り惜しそうにアメリカ大手 hexsoft 社製のケータイをヒデミに手渡した。

「丁寧に扱ってほしいのは、ケータイ、イラスト、どっちかしらね？」

ヒデミは、平賀のケータイに描かれたアニメの美少女の絵を見て、さっさと平賀の元から離れた。

それから数席回ってクラスメイトたちからケータイを回収した後に、「ホレ」と今度は上田の前に籠を差し出した。

「俺は、今日持って来ないぞ」

上田が目も合わせずにそう答えると、片眉を上げてヒデミが言った。

「ごくんねん。上田くんのアドレス、教えてほしいって女の子いるのになあ〜」

かわいい声と素振りですりを入れる。

「え、ホントかよ？」

そう言って上着の内ポケットからケータイを取り出すしぐさをしてから、上田はしまったと顔をしかめた。

「はい、出して」

先ほどとは一転、冷たい口調のヒデミは再度、上田に提出を求めた。

「今の話、嘘じゃないよな？」

しぶしぶケータイを籠に入れた上田が希望を込めた声でヒデミにすがるも、「ええ、嘘じゃないわ。それって私……」と仏頂面のヒデミはまったくもって感情のこもっていない口調でトドメをさした。

「バカね、男子って」

机に塞ぎこんだ上田の後ろで、毒づくマリであった。

こうして石田とヒデミが毎回説得し、ケータイを回収してまわるのが朝の風景となっていた。

ケータイを回収し終えたふたりが籠を持って教室から出て行くと、マリはふと窓の外に目をやった。教室からは校庭を挟んで正門が見える。その正門前には、教育指導の大岡先生によって叱られている【前田ケンジ 2年A組 柔道部主将】の姿があった。

巨漢の大岡先生と比べても、見劣りしないほどのりっぱな体格。それもそのはず、前田は柔道のスポーツ推薦で入学したエリート選手なのだ。

しかしながら、全国大会で優勝間違いなしと踏んだ学校側の期待を裏切り続け、前田の成績は、今のところ2位がベストだ。それも決勝戦では不戦敗。聞いて呆れるその敗因は、会場近くの公園で居眠りして遅れたため。この男を紹介する際の、最も前田らしいエピソードである。

学業に関してはほとんど落第点。おまけに遅刻の常習犯でもある。しかしながら全国大会2位

の実績により学校側も目をつぶっている。唯一、曲がったことが大嫌いな大岡先生を除いては……。

「この松風号がパンクさえしなければ、間に合っていたんだって！」

前田がそばにある自転車のサドルをバンバンと叩いている。

「こいつに免じて、見逃してくださいよ〜」

大柄の前田がそう言っているのが、素振りで見える。マリはその様子をアテレコしては、一人クスリと笑う。

「あっ！」

しかし次の瞬間、マリは小さく声をもらした。大岡先生から猛烈に叱られている前田を尻目に、軽い身のこなしで瞬く間に、胸ほどの高さの壁をのり越えて、校庭に侵入する者の姿を目撃したのだ。

この者の名は【服部テツオ 3年B組 体操部部长】。マリからすれば一学年上の先輩となる。身体能力が非常に高く、備八高体操部の実力を、彼の代で一気に県内トップクラスまで引き上げた。口数は少ないが、目立ちたがりやでナルシストな面もある。そのため女子からキワモノ扱いをされているが、部員からの信頼は絶大。高校卒業後は体育大学へは行かず、アクション俳優になることを志している。

「いいか前田。不満があるなら、全力で先生にぶつかって来い！」

大岡先生は忍び足で校舎入り口に向かおうとする服部の存在に気づいていない様子だが、前田が叫んだ。

「先生！ 後ろ！」

力一杯、服部を前田が指さす。

「うん？」

大岡先生は前田に言われるまま後ろを振り返る。しかしその動作よりも一瞬速く、服部はひょいっと初代校長の胸像の裏に身を隠した。

「……」

前田の方に向き直った大岡先生。頭が、拳が小刻みに震えている。

「マ・エ・ダ……。先生をバカにしているな？」

「えっ？ 違うよ、センセっ。さっきあそこに3年の……」

大岡先生の表情がだんだん険しくなっていく。

「きたねーぞ！」

拳をつき上げ、胸像裏の服部に向けて前田は抗議の声を上げた。

「きたないとは何だ！ それが先生に向けて言う言葉かああ！」

怒髪天を突かれた大岡先生が前田の片耳を掴んで引っ張り上げた。

「イテテテッ。痛いっってお奉行さま！」

「誰が悪代官だ？ ええ！」

「お奉行だっつーの！」

重量級の前田と大岡先生のやりとりを背に、服部は外していた胸元の第一ボタンを留め直した。

「許せ前田！ お前の犠牲、無駄にはしないぞ」

捨て台詞をはき、何事もなく校舎内に入って行く服部であった。

「……どうして男子って、みんなこうなのかしら？」

一連の出来事を眺めていたマリは腕組みしつつ、前の席に座る上田の後頭部を見つめた。

そして、始業時間を告げるチャイムが鳴った――。